
バカとテストとアイドルマスター

柊稜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとアイドルマスター

【Zコード】

Z5914Z

【作者名】

柊 稜

【あらすじ】

たった十二万で一年間を生き抜くことになった浅井真理。途方に暮れていた彼を救つたのは、渋いおっさんだった。

アイマスとのクロス？・・・コラボを予定しています。

文用学園（前書き）

とこう訳で、前々からあーだこーだ言つていたものを始めてみました
HISとの平行なので、間違いなく更新は落ちます d(・・・=)

「・・・はあ」

俺は、どうしていいかも分からずにただプログラマとあたりを歩く正直、これからの一年間に絶望しかない

「1年12万でどう過いせつていうんだよ・・・」

おそらく、派遣の人とかだつてもう少しはあると思ひや。勝手な予測だけだ

なにがあつたかというとだ、朝起きたら12万とともに書置きがあつた

『まーくんへ 突然ですが、おかーさんとおとーさんは欧米一周旅行に出かけることになりました! いやあ、これもまーくんに手がかかるくなつたおかげだよ。多分一年は戻らないと思つから、その間そこのお金で頑張つてね~^~ んおかーさん』

一瞬、目を疑つてしまつた

目の前には12万

そしておそらく一年は稼ぎ手がないことを宣告する文章

俺は、通帳とか暗証番号とかしらん。だから、銀行にあっても下ろせない

「ふざつけんなあああああっ!」

・・・とこう事があったのだ

そしてあの一人は生活費オンラインで12万置いていったようだ

「学費、どうすんのよ」

と、俺は途方に暮れていたのだ
さつとバイトでも見つけないと、すぐに生き倒れちまう・・・

「んんっ？ 少年よ。どうかしたのかね？」

不意に、そんな野太いおっせんの声が聞こえた

清涼祭アンケート

学園祭の出しものを決めるためのアンケートに協力ください

『あなたが今欲しいものは何ですか？』

姫路瑞希の回答

『クラスメイトとの思い出』

なんせ。お客さんの想い出になるような、そういう出した出しものも

いいかもしませんね。写真館とかも候補になりえると覚えておきます

吉井明久の回答

『カロリー』

この回答に吾の生命の危機を感じられます

浅井真理の回答

『生きていけるだけの資金』

・・・え？

で、そんなことがあつた三ヶ月後

桜色の花弁が散り、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節

俺は浅井真理
あさいまさみち

ミステリアスなイケメンで背のたけ

「いや、むしろ童顔チビ助だな」
「そこー黙らつしゃい！」

地の文に突っ込んでくるとは。まつたく・・・

「いっぽは坂本雄一、赤い短髪と、ゴリラのようなゴツイ体が特徴だ
ガタイの通り、中学では不良。小学生のころは神童とか言われてい
たけど今は昔の話

しかも、学年首席で幼馴染である翔子に熱烈ラブコールくらつてゐ
るに本人は拒否している。ブサイクのくせに
ちなみにこいつと翔子とは小学校から今までずっと一緒に上がつて
きた仲だ。ブサイクだがな
人は幼馴染と言うだろうけど、はつきりいって腐れ縁だ。ブサイク
だからな

「ブサイクブサイク、うつせーぞコラ」

「ははは・・・」

で、そんな雄一の隣で苦笑いしてるのは吉井明久
はつきりいってしまえばバカ。いい意味でも、悪い意味でも。
どこのそのへタレゴリラよりはずっと好感のもてるタイプの人間だ

高校入学からの仲だが、いつも気がつけば雄一と一緒につるんで何
かやつてた

結果ついた異名が『3バカ』だった

ちなみに、明久は観察処分者という学園一不名誉な称号を持つてい
たりする

「お前も、持ってるだろ？が」

「いちいち地の文に口をはさむなっ！それに、男には守らなければ
ならない一線があるんだよ！一線が！」

「・・・その一線も、呆気なく越えられる運命」

「おわッ。ムツツリー——こつの間に」

「・・・最初からいた」

「いっは土屋康太。はつきりいつて『寡黙なる性識者』といつ渾名の方が有名
工口に対する執着はものすごいのに、ちょっとした露出で鼻血を吹く程初心

あと、自分の下心はモロバレでも隠し通す

「・・・失礼な」

「失礼って言われても、それ以外に話すようなことないし・・・」

「つていうか、もうチョンジだよ？ほら、守備守備」

「お、みたいだな」

「あいつら、凡退しやがって・・・」

俺が通っている文円学園では、『清涼祭』なるものの準備が始まりつつある

どのクラスも、焼きそばやらベタな物をやろうとするところや、広い教室を利用してお化け屋敷をやろうとするクラス

どのクラスを見ても活気であふれている

んで、俺たちのクラスはどうと・・・

「吉井！ こいつ！」

「勝負だ、須川くん！」

「お前の球なんか場外まで吹き飛ばしてやるー！」

俺たちは、グランドで勝手に活気づいている

俺はあんなクラスでじつとしているられるほど・・・

「貴様ら、学園祭の準備をそぼつて何をしていろかー！」

「やばい！鉄人だ！」

ものすごい勢いでこつちに走つてくる担任の鉄人・西村宗一
奴は無駄に足速いから、大抵のヤツはつかまるな

「吉井！浅井！貴様らがサボリの主犯か！」

「なんで何があるたびに俺らになるんだよっ！」

「雄一です！クラス代表の坂本雄一が野球を提案したんです！」

「そうなのか坂本！」

よし、鉄人の視線が向こうにそれた！今ならば逃げられ……

「浅井、そんなに慌ててどこに行く気だ？」

ギクウ

「きょ、きょうしつにも、戻ろうかと……」

「なら、先に戻つていろ。もしいなかつたら、明日から雑用が増え
ると考えとけ」

「い、いえっさあー……」

ああ・・・おつかねえ

教室に戻つてしまふ後、体が震えるような声の鉄人の恫喝を
聞いた

「て、鉄人も大変だなあ・・・」

文用学園（後書き）

とこう訳で一巻飛んで一巻の内容からでした

一年Fクラス

ここは、俺の所属するFクラスの教室
結局、全員鉄人に連れ戻されてきた

床は御座をしいただけ。机はみかん箱じやあ誰でも広い校庭に逃げ
出したくなるわな

ちなみに、学年の成績上位者で構成されたAクラスはリクライニングシートだつたりと超がつくほどの格差がついている

とまあ、そんなことはさておいて

「そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

いやむしろ過ぎてるくらいですからね

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権をゆだねるので、後は任せた」

ああ、やる気ないオーラが漂ってるよ

あいつは興味のないことに関してはいつもこんな感じだ

「吉井君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

そう言つ姫路の声が聞こえて来たのは、俺の席が明久の前にあるからだ

絵に描いたよな優等生で、実際の成績なら学年次席クラスの学力がある

にもかかわらず」のクラスに居るのは、熱出して途中退席したから

だとか

でも、俺は姫路よりは島田の方が・・・いやでも・・・いやしかし・

・

「んじゃ、学園祭実行委員は島田とこいつ」とでいいか?」

島田美波

ポニー・テールが特徴のFクラスに一人しかいない女子のウチ一人
ドイツ帰りの帰国子女で、字が読めればそれなりに点が取れる
字が未だ読めないときがあるからこのクラスに居るんだがな

「え? ウチがやるの? うーん・・・、ウチは召喚大会に出るから、ちよっと困るかな?」

「雄」。実行委員なら、美波よりも姫路さんの方が適任なんじゃないの?」

なんてことを明久がいっている

大方、事が荒立たずに済むと思ったんだろうな。でも・・・

「姫路は無理だろ。多分全員の意見を丁寧に聞いてるついでタイム
アップだ」

「姫路には速さがたりないからなー。それを重視して考えると、多少荒くとも島田の方が適任かもな」

「多少荒くは余計よ。・・・それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え? そうなの?」

「はい。美波ちゅあんと組んで出場するつもりなんですね」

召喚大会はペア出場なのか

翔子でも誘つて……いや、翔子は無理か
代表だからあいつも忙しいだらうし

「秀吉かなあ……」

うん。そこが一番無難だな

「？ 真理よ、ワシがどうかしたのかの？」

「お、秀吉。いいところにいたな」

木下秀吉

女のような顔をしているが一応れつきとした男だ
演劇部で、声真似とかが上手かつたりする

「召喚大会に一緒に出ないか？ 出たいんだけど、ペア組む相手が
いなくてな……」

「誘つてくれたのはありがたいのじゃが、ワシは演劇部の公演があるから無理なのじゃ」

ああ。それは仕方ないな

「分かった。他をあたつてみるよ」

「すまんの……」

「いや、いじつてことよ」

何がいいのかはよく分からないが、とりあえずさう言つとへ
さて・・・あてがなくなつてしまつた

他の奴らなんて実力お察しぐださコレベルだしなあ・・・

あいつらは、多体一の状況だからこそ勝てるのであつて、決闘とかそういう一対一には不向き

ムツツリーは保健体育以外はF並で安定しないし・・・

「うへん・・・」

「・・・真理、上の空になつてないで、こちの話を続けてもいいか?」

「あ、悪い雄一。・・・んで、島田が実行委員つて話だつけ?」

「だからウチは召喚大会に出るつていつてるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それならいいだろ?」

で、しばらく議論のあつた結果、なんだかんだで明久になつた

「なんだか、僕はいつもこんな貧乏くじ引かされてる気がするよ・・・」

・

そういう屋の下に生まれたんだろう。諦めも肝心だぞ

「んじゃ、後は任せたぞ。ふあ・・・」

「お前もお前で、少しさはヤル氣出したらどうなんだよ・・・」

「めんどくさい」

「さいですか。・・・で、翔子とはあのあとどうなつたんだよ」

「あのあとつづーと?」

「つたく・・・試召戦争のあとだよ。『私には、雄一しかいない』なんて言われて何もないなんてことはないだろ?」

あれつきり携帯にかけても通じなかつたし、お楽しみでもあつたん

だつたら野暮だつたかな？

「急に体が痺れて・・・気づいたら体を縛られて床に転がされていた」

わお。随分と激しかったようだ

翔子がヤンデレにならないよう・・・あれ?手遅れ?

「まあ、今まで待たせたツケだと思え。男なら、愛で乗り切れ」

「今までのツケで死にたくないんだがっ！」？

「じゃあ、つまんねえ意地張つてないで自分に素直になればいいんじやんか」

「・・・意地なんかじやねえよ」

「はあ。あのな、雄一」

ガラガラ

そんなときに鉄人がやつてきた

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

そういうや、出し物を決めてたんだつけ

ヘタレバコラにかまつてる場合じやなかつた

えつと・・・候補は

「候補？」『真館』『秘密の覗き部屋』

ムツツリーー提案ですね。分かります

「候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』」

「候補？ 中華喫茶『ヨーロピアン』」

なんつーネーミングセンスしてんだよ

「・・・補習の時間を倍にした方がいいかもしれんな

鉄人は、こめかみを押さえながらそつそつぶやいた

『せ、先生！ それは違うんです！』

『そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

みつともない言い訳をする、みつともないクラスメートたちに、鉄人が一喝

さすが鉄人。いうことが違

「先生はな、馬鹿な吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言つてるんだ！」

「それが教師の言つことかあつ！」

さうじつと酷い事をいつ。明久が泣いているぞ

「まったくお前たちは・・・少しまじめにやつたらどうだ？稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういうった気持ちにすらならないのか？」

「それってありだつたんですか?」「

「アリも何も、そうでもいわないと、お前たちはやる氣をださんだろ」

『そりか!その手があつたか!』

『なにも試召戦争設備向のチャンスじゃないよな!』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ!』

急にやる氣が出たクラスメート一同。なるほど、流石だ
しかしあ『カジノを作ろ!』だの『焼きトウモロコシを売れ!』
だの、話が次第に脱線してきた

個性の強い連中が多いせいか、まとまりがない。これをまとめられ
んのつて雄一だけじゃ・・・

「NNN・・・」

奴め、寝てやがつた!平和そうな面しやがつて!

「とにかく静かにして! 決まり! ないから、店はさつき上がる
つた候補の中から選ぶからね!」

業を煮やした島田が決めにいった

一度決まればなんだかんだいってそれやりだすだらうから、こ
れも一つの解決策だな

多数決の結果、2-Fの出店は『中華喫茶『ローポップ』』となつた
当然といえば当然というか、こんな設備で飲食店とは。問題山積み
だなあ・・・

「ああそつだ先生」

「ん？ なんだ？」

「放課後、学園長室に行きたいんです。出来ればアポとつておきた
いんですけど・・・」

「珍しいな。何を話すかは知らんが、話は通しておいてやるわ」

「ありがとう」ゼロこます

「許可されるかは、知らんがな」

そして、仕事するか

コンコン

ノックの後、相手の応答を待つ
「入りな」

OKサインが出たので、襟元を正してから入室する

「失礼します」
「それで、あたしに話ってなんだい？」

ここは放課後の学園長室

何だか無駄に高そうなものがいっぱいある

なんの書類かは分からぬが、ざっと目を通しては顔をしかめている

「では、お忙しいようですので本題を。・・・清涼祭にウチのアイドル達を使つてもうための、交渉をしてきました」

「はあ？アイドル？」

そういうと、藤堂力ヲル学園長は目をあげる

ある時、俺は『芸能プロダクション 765プロ』の代表取締役社長、高木順一郎と名乗つたおっさんにあつたで、田付きを気にいられてそのまま事務所に連れてかれ、プロデューサーとしてスカウトされた

金に困っていたこともあり、俺は即決だった

「ええ。 . . とはいっても、まだまだこれからなんですねけどね」

「アンタ、振り分け試験をサボつたのもそれが原因かい？」

「ま、まあ、そう言われば、そんなんですけど . . . 」

即決したはいいが、就職の手続きやら、先輩からのアドバイスを聞いたりで、振り分け試験に出ることができなかつたのだまあ、事前にテストの事を言わなかつた俺の落ち度だから、Fクラス入りは仕方ないと割り切るしかない

学園長の田^たが細くなる。心証悪いだらうなあ

「じゃあ、ダメさね。学業をおろそかにしている生徒のいつ事を、おいそれと聞くわけにもいかないのぞ」

「や、それは、そうですが . . . 」

結局、これを言われてしまえば俺は返せない
返し方が分からぬ

「・・・とまあ、普段ならそういう言ひてるんだが、一年次の成績を見る限り学業を疎かにしているとは思えない。それに、礼儀もしつかりしている方だから、それに免じて仕事をやつてもいい

「本当ですか！？」

敬語やマナーについて、しっかり聞いておいて正解だった

「あたしからやれる仕事は、召喚大会への出場だけさね。それでいいかい？」

「あの、ライブはよろしくのでしようか？」

「アンタらの好きにするといい。ただし、学園経営つてのも金が掛

かつてね。アタシいらからはビター文も出せないよ

それでも充分だ

文月学園はちよいと特殊なシステムを導入しているため、各企業や他校の関心も高い

結果や行動次第では、企業への宣伝にもなる

「もちろんです！それで、人数の方は？」

「焦るんじゃないよ。慌てると、貰いが少なくなっちゃうよ。」

「う・・・す、スマセン」

胆に銘じておこつ

「で、人数ねえ・・・。そうさね。ざつと4人ぐらいいれば十分だろうね。ゲストみたいな感じになるから、空き時間は清涼祭を見て回って欲しいね」

「はい、ありがとうございます」

「ああ、先もいつたようにウチから払える金は無いからね。召喚獣作成とか、操作指導とか、そういうサポートでキャラにして貰つていいかい？」

・・・なんつーか、これ考えてたのか？

下手に食い下がれば振り分け試験のネタで話を蹴られかねないし、素直に飲むしかない

「わかりました」

「じゃあ、他に詳しい話はまた明日。用が済んだなら、そつぞと帰んな。後がつかれてるんだよ」

「失礼しました」

まろつちい教室に戻つてみると、そこには鷗田と秀吉がいた

ちなみに、他の奴らはとっくに帰つたようだつた

「あ、浅井」

「みないと思つていたら、何処にこつておつたのじや？」

「用事があつてな。学園長室の方に行つてた」

「こりでウソをこつてもしようがないか

「・・・アンタ、また何かやつたの？」

「学園長室に用があるとは、珍しいの?」

「失礼な。俺だつて学園長と話したい」との一つや二つあるや。・・・

・で、一人で何やつてんの?」

「いまね、アキを待つてるの」

「明久を? また、なんで?」

「雄一の奴を清涼祭に引っ張り出すために、一働きしてもうつてこ
るのじや」

「あー・・・なるほど」

明久を使つたところで雄一の奴が動くとは思わないけどな・・・
あいつ寝てたし、出店が何になつたかなんて知らないだろ? な

「うん。今回の清涼祭をどうしても成功させたいの。そのためには坂本の力を借りないといけないって思つて……」

このクラスの奴らは俺を含めて教師陣でも手に余る連中が圧倒的に多い

統率できるのは同じバカである雄一ぐらいなものだろう
その雄一がいないんじや、出店が成功する可能性は低いわな

「で、その雄一は何処に居るんだ?」

「それがね、アキが言うには『みつかっちまつた』とか『鞄を頼む』
とか言つてたみたいなのよ」

「大方、霧島翔子から逃げ回つておるのじゃろうな」

あー・・・

「何があつたかはよくわからないけど、どうも須川情報によれば付
き合つことになつたんだってな」

「どうして須川がしつているのかは疑問だけど、だいたいそんな感
じね」

「雄一本人は否定しとるのじやが」

あいつ、普段は色々と大胆というか、傍若無人な節があるのに翔子
のことになると弱いからなあ・・・

「逃げ回つてるんだつたら、大方女子更衣室にでもいるんじやない
かな?」

雄一のことになると、翔子は女子禁制のところでも平氣で入つてゆく
だつたら裏を突いて男子禁制の場所へというのが、雄一の考えだろ
うな

多分「れぐり」なら明久でも翔子でも思いつくと思つ

「・・・何でそんな発想にたどり着くのよ。変態」

「えつ？」

ものすくべ冷めた目で島田が睨んでくる

「窓拍子もなくそんなことを言つたものなら、誰だつて変態と思つ
ものじや」

「・・・島田」

「なによ？」

「勘違いしてもらつむや悪いが、俺は紳士だ！」

「・・・あんたが言つと、頭に『変態』がつきついね」

失礼な！それって今の印象で決めただろ！
俺はいつだってジョントルメンだ！

「つて、話がそれたな。・・・それで雄一引つ張り出してまで成功
させたいのはこ」

「あ、アキからみたい。ちょっと、『メン』」

どうも島田のケータイがなつたようだ
あれ？ 秀吉が咳払いしてゐ

「バ
ッ

「もしもし？ 坂本？・・・ちょっとまつて。今替わるから」

そうこうで、島田は秀吉にケータイを渡した

「・・・雄一。今ビート

喋ったのは秀吉

でも声は翔子のだった

・・・秀吉って声真似もできたんだ

「で?どうだつた?」

「『人違いです』と言われたと思ったたら、切られておったのじゃ」

とつとの判断で人違いといふとは・・・
元神童は伊達じやないといったところか

「じゃあ、俺は帰るわ」

「え? なんで?」

「行くとこあるからな。じゃーなー」

「あ、ちょっと・・・」

ぱろつちいを通り越した教室から出ると明久とはさわせら

「あ、真理・・・」

「お、明久。俺はもう帰るわ」

「ちょ、ちょっとまつてよー!」

「真理、いつちやつたね・・・」

「ほつとけ。人には人の事情があるんだよ」

「真理にも話しておきたかったのになあ・・・」

「最近、浅井つてすぐ帰っちゃうよね」

「あ、美波に秀吉」

「しかしまあ、今日の真理はどいか上機嫌じゃったの?」

秀吉は演技に精通している

だからかな。人が隠している物をあつたり見破つてしまつ

「秀吉がそういうならそつなんだろ?」

「でも、なぜかは分からんぞ」

「大方、女でも出来たんだろ?」

くつ・・・女ができた・・・だとつ!?

「というか、今は浅井の隠しごとよりも大事な話があるんだから!」

「そうじやつたの。学園祭を成功させるつて話じやつたな」

「島田、俺を引っ張り出してまで成功させたいのはなんでなんだ?」

「実はね・・・」

そこで、美波は姫路さんの転校の話をした

お仕事（後書き）

とこうの事で、眞理のそれっぽいお仕事でした
アイドルのケアだけでなく、仕事取るのも仕事の一つですよね？

番外「バカとアイドルとクリスマス」（前書き）

メリークリスマス

という事で番外クリスマス企画を出してみました

・・・キャラ的には本編フライング気味ですので、後で順番に変更
入れるかもしません

番外「バカとアイドルとクリスマス」

「メリークリスマス！」

ぱんぱんぱーん！

クラッカーの音とともに、くす玉が割れる

そこには、『メリークリスマス 順一郎』と筆で書かれている

今日はクリスマス

雑多な書類や机は整理され、今は事務所のアイドルたちのささやかなパーティーが開かれていた

「せっかくのクリスマスなのに、ここでよかったのかね？」

「・・・せっかくのクリスマスだからこそ、ここで祝いたいんだそうですよ」

『せっかくですから、事務所で』

そう俺に言つて来たのは他でもない、彼女たちからだつた正直、俺も高そうなレストランを貸し切るよりもこっちの方がずっと楽しい

それに・・・

「僕達まで来てよかつたのかなあ？」

「当たり前だ。クリスマスはいろんな人といったほうが楽しいだろ

「いや、それはそつだが・・・」

「他のクラスメイトに知られるど、ワシら即刻異端審問にかけられてしまつと思ひのじやが・・・」
「気にしたら負けだ」

「いつやつて、外部の人をいつそり呼べるしな

「だけど、ウチらが来て本当によかつたの?」

「当たり前の」

「あ、美希ちゃん」

「今日は『トクベツ』な口だもん! みんな楽しもつよー。」

「ほひ、明久くんや土屋くんも!」

「え、あ、ちょ・・・」

「・・・(バタバタバタ)」

男子陣も、あつといつ間に中に連れて行かれる

『んつふつふ~。ヒトちゃんあそぼーー。』

『わ、わしは男じやから、せめて「ヒトくん」で・・・』

『それ一つ!』

『ちょ、何故ワシの服を脱がそつとあるのじやー。』

『千早お姉ちゃんの衣装が似合いくつだよね~』

『ワシは男じやー。』

『坂本さんーこれ、おいしいですよー。』

『ん、どれどれ・・・へえ。この唐揚げつまいな

『それ、私が作つたんですよー。』

『へえ。天海さんつて、料理できるんだ。今度一緒に作ろつよー。』

『明久くんも料理できるの?』

『パエリアをちよつとね』

『・・・雄一も料理は得意』

『ええっ！？坂本くんもできるの！？』
『まあ、お袋があれじゃあ』

『やつぱりクリスマスはオレンジジュースよね』
『でこちやんだと、「は」じゃなくて、「も」だと思つの』
『おでこのお姉さん、オレンジジュース好きなんですか？』
『葉月は嫌いなの？じゃあ、この味が分かるまでお預けね』
『伊織ちゃん、なんかこれ苦くない？』

『はて？康太、顔が紅いですよ？』
『・・・なんでもない』
『でも、大丈夫ですか？何だかますます赤くなっているよ？な・・・』
『・・・なんでもない』

それぞれがそれぞれの会話をした、和氣あいあいとした空間

「・・・お前は、入らなくてもいいのか？」
「私は、こいつやって見てる方が好きですから」「そうなのか？」
「はい。みんなの笑顔、私にはもつたいたいないくらいですよ」

苦笑しか返せない

「それに、私ばかり楽しむのも
「ただいまー！」
「おかえり。響との収録はどうだった？」
「へへっ！ バツチリですよー。」
「自分と真のナイスコンビ、見せたかったぞー。」
「そつか。じやあパーティー始まってるから、参加しておいで」

「え？ プロテコーサーはいいんですか？」

「俺は、こうやって見てる方が」

『瑞希ちゃん。その箱は？』

『あつー…やっぱ私、家でケーキを』

「こいと思う訳ないじゃないかーほら、響、真、千早！行くぞー！」

「お、おーっ・・・・」

「え、ちよっと・・・・」

アットホームで和やかな空気が死屍累々の惨状へと変貌するのを、未然に防がなくてはっ・・・・！

『あ～ヒトちゃんずるい～亜美達だつて姫ちゃんの手作りケーキ食べたいのに～！』

『ああつー坂本さんどうして食べひやつんですか！みんなで分けて食べなくちゃダメじゃないですか～！』

『瑞希ちゃんのケーキ、おいしそうだなあ。・・・私もマネしてみようかな？・・・どうして明久くんはそんなに首振ってるの？』

『つー？怪しい氣が 康太つー？何故そんなに急いで食べるのですか！？私にもひとつち・・・・』

「・・・男子諸君の反応が聞こえてこないのが、不思議だよ

「きっと、言葉にならないくらいおいしいんですよ」

「ありあり～。羨ましいですね～」

「何だね？この不吉な予感」

「」せ階下の居酒屋たるき亭

上の賑わいは、当然この場所にも筒抜け

765プロの大人たちが、「」から上の様子を肴に酌み交わす

「ところで、律子さんは向こうに行かなくていいの？」

「私は、いつも落ちついたところの方が好きですし、あの子たちの面倒は、真理くんが見てくれるだろうし」

「つか。たしか律子さんは、お茶でしたよね？」

そつこつて、たるき亭の小川さんは、律子に暖かいお茶を差し出す

「ありがとう、小川さん」

「あれ？ 律子飲まないの？」

「あのねえ、私一応未成年ですか？ お酒を勧めるのは、どうかと思います」

「そういうやうだつたつけ」

「もー・・・同僚の年齢くらい、しつかり覚えていてくださいよ」

「・・・」

真理の先輩のP、タカはじつと小鳥を見る

「な、何ですか？ タカさん・・・」

「小鳥さんってたしか、にじゅつは 「それは、トップシークレットです！」 スイマセン」

「うふふつ。こつちはこつちで、賑やかですね。じゃあ小川さん。いつものお願いしますね」

「はーい。えーと・・・あれ？」

不思議そうな顔をする小川さん

「てんちょー。オレンジジュースのチューハイビンですかー？」

『冷蔵庫の中に無いのかー?』

「普通のオレンジジュースしかありませーん」

『そりいや、さつき伊織ちゃんがオレンジジュース冷やしてたよなあ?』

大人们はいつせいに嫌な汗をかきだす

「…………まさか」「」

「さて、危険ぶ……げふん。姫路のケーキも食べ終わつたといひで」

「結局、兄ちゃんたちが全部食べちゃつたもんね」

「真美たちも食べたかったなあ」

やめろ。お前たちには刺激が強すぎる
舌がしづれるのをじらえて、わざわざ進める

「あ、後でケーキ買ってやるから。ではー!」
でプレゼントターゲット

「イエーイ!」

「ルールは簡単つー自分のプレゼントを持つて、曲が止まるまでぐるぐる回していくんださー!ではでは!!」
ヨージックつーすたーとつー

「」

(Drama Don Quijote) 聖なる鐘の音が

「ちょっと待ちなさいっ！」

「え？なんか問題あつた？」

「曲よキヨクーせつかくなんだから、この伊織ちゃんの曲を使いな
れどよー。」

「こや、だつてひロないし・・・」

「！」は事務所よ～つ！？探せばあるあるー。」

そういう伊織は、顔が紅い

「ちょ、伊織っ！？うわ、酒くさ・・・」

「そんなことビーフでもいいのよー！みゅ～じつくう～・・・スター
トっ！」

知らぬが 仏ほつとけない
くちびるポーカーフェイス

「何で、『SMOKY THRILL』・・・

「そんなの、どうりつていいじゃないの」

「・・・伊織、お前酔つてないか？」

「この伊織ちゃんが、オレンジジュース」ときで酔つぱらつ訳ない
じゃないのーー！」

また、酔っ払いの常套句みたいないとを・・・

「つーか・・・そのオレンジジュース見せてくれ。飲みやしないか

「ら

「そ～あ～？・・・はいこれえ

えーと・・・

「酒じやねえかーちょっと下にこいつてくれるから、千早音楽任せたー。」

「ええっ！？あの、ちょっと・・・」

「社長ーなんことを・・・」

俺は、伊織を介抱するためにつあえずたるを嘗へと降りた

「アキい～」

「み、美波！？ちよ、酔つてゐー？」

「お姉ちゃん！？バカなお兄ちゃんにそんなことしちゃ

「

・・・もう一人、連れて行かなきゃいけんのか
待つてくれ、明久

「あーあーあー・・・案の定か」

「ほら伊織、島田。これ飲んで」

「ぐびり・・・ふは

「あは

少しは落ち着いてきたようだったが、明日は一日酔つて泣くんだろう
うなあ・・・

「「NNN・・・」

「あ、寝ちゃつた」

「はあ・・・伊織と島田さんは私たちが見てるから、真理は上に床
つていいくわよ」

「うひつす。一人の」と、お願ひしますね

そうひつて真理は、たるき亭を出て事務所へ戻った

「あの・・・すいません」

「ああ、気にしないでください小川さん」

「でも伊織ちゃんが・・・」

心底申し訳なさそうにこちらを見る小川さん
などというか、無理にもできないなあ

「じゅあそうですね・・・。一杯奢つてください」

「スッ

ナイスなグーが落ちて来た

「・・・音楽、終わつたわね」
「じゃあ、今もつてるのを開けていいぞー！」

いつせいに今持つてゐる袋を開ける

「あきぴょんのクッキーだーせつたねつ！」「
「真美も真美もーこれは・・・なんか黒いね? ハーフア混ぜすぎたの
かなあ?」

「あれ? 私もクッキーだ。面白い色だなあ・・・」

「す、スコップ……ですか？」

「……パッド？……（ブブーッ）」

「演劇七つ道具？……そうだ！これで僕も……」

「ぼーるペん？にしては、何だか面妖な気を感じますが……」

「まさかのフリル一杯のスカート。俺はもう女装は御免だぞ」

「……雄二なら、きっとにあつ」

「似合わないからな！？」

「『一日お手伝い券 by 真理』……敬老の日じゃないんだから

やー」

「ほう？これは楽譜かの？演劇につかえるやもしれぬ

「わーい！くまちゃんですっ！」

三者三様、十人十色なプレゼントに驚いたり笑ったり
欲しいものではなくても、自分のものが回ってきた人でも、自然と
頬が緩む

「ではでは早速……」「いつただきまあ〜すっ！」

サクリ
ガリッ

「ん〜…おいしい…アキピょんやるねえ〜」

「！？！？！？！？！？」

双子の反応は、雲泥の差、月とすっぽん（？）であった

「真美つ！？大丈夫！？」
「う・・・あ・・・」
「真美つ！？」
「・・・（グツ）」

バタリ

「真美いいいっ！」

その顔は、まるで眠っているかのような安らかな表情だった
そんな双子の寸劇の傍ら、顔を真っ青にしているのは男子陣一同
いつせいに姫路を見る

「ひ、姫路さん。プレゼントになにを用意したの？」

「はい、手作りのクッキーです」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

とは、自分に回つてこなかつた安堵からか、一人の可憐なアイドル
を散らせてしまつた罪悪感からか、言い出すことは出来なかつた

「・・・み、瑞希の特性クッキーって、何が入つてるの？」

「特に変わつたことはしてませんよ？ああでも、隠し味をちょっと
入れましたね」

「隠し味？」

「聞きたいですか？」

うふふと笑う瑞希は、何だか魔女にも見えた

「え、遠慮しておくの」

「そうですか？残念です」

美希は、触れてはいけない何かを感じたのだろう

それつきり追及することなく、辺りは異様な空氣に包まれた

「・・・真美、もういいよ？」

『え？』

むくっと起き上がる真美

「じゃーん、ねえねえどうだつた？真美の迫真の演技！」「び、ビックリさせないでよ真美ちゃん。・・・あれ？じゃあ、姫路さんの作ったクッキーは」

「いだきま～す」

一同がぱっと春香を見たが、時すでに遅し
そこには、クッキーをかじつた瞬間に、みるみる顔が真っ青になる
春香がいた

真理は、また往復することになった

「つう・・・お腹痛い」

「・・・姫路の料理たべて、それだけで終わるのはある意味幸運
だよ」

流石に、クッキーにはそこまでアレンジ加える余地がないようだな
硫酸ブチ込まれてたらどうしようかと・・・
あ、でも炭になるか？どうだったかなー・・・

「春香も、一人の隣で休んでな」

「はい・・・すこません」
「謝ることないつて。胃薬飲んで休んでれば、すぐ良くなるわ」

時計をちらりと見る

「・・・さてと、ぶつ倒れた奴もちらほらいるが、とりあえず時間
もいい感じだし、そろそろお開きかなあ」「

『えへっ・・・』

「『えへっ』じゃない。そろそろ帰らないと、親御さんたちが心配
するから・・・」

「それじゃあ、しょうがないの。//キももつ眠いし・・・あふう」「

「やうかもねえ・・・西美達もちよつと疲れたし」

聞きわけが良くて何よりだ

春香はともかく、伊織と島田は酔つたまま帰すわけにもいかないし
なあ

「明久、島田が目を覚ますまで一緒に居てやれ。お前なら別に問題
ないだろ?」「

「うん」

「だつたら、私も・・・」

「いや、明久だけで十分だ。翔子、雄一と一緒に送つてやってくれ
ないか?」「

「でも、葉月ちゃんが」

「・・・わかった。瑞希、雄一。こいつ

「あ、ちゅうと」

三人は事務所から出ていく

女一人だけど、雄一がいれば問題ないか

「秀吉は？」

「ワシは、亜美と真美を送りながら帰るぞい」

「ムツツリーーーは？」

「・・・千早と響を」

「あんまり変なことするなよ」

「・・・変なことなんてしない（ダバダバ）」

大丈夫かおい。途中まで秀吉と一緒にだから問題ないだらうけだ

「貴音はやよいを」

「わかりました」

「プロデューサー。お疲れさまでした！」

「うん。お疲れ」

いやあ、やよいは元気だなあ

「んじやあ、雪歩、真、春香、美希は俺が連れてくか
はいっ」

それぞれのお店のライトアップが、聖夜の街を照らしている
私とプロデューサーは今一人つきりでこうやって歩いている

ノエル

昔の私だったら、『男の人が……つて、距離とつてたのかなあ？

「なんつーか、あつという間だつたなあ」

「そうですね。でも、楽しかつたです」

「そつか？そりやあ、アイツら呼んだ甲斐があるつてもんだよ」

プロデューサーは、ヒヒヒヒ笑う

「でも、私はもひちよつと遊んでたかつたなあ……」

「アイツらなら大丈夫なのか？その、男嫌い」

「はい。なんて言つたか、皆優しいですか」

「そつか？明久はともかく、他の奴らは……」

プロデューサーは不思議そうな顔をしている

クリスマスのライトアップに照らされて、いろいろな色に光っている

「まあ、雪歩もいろいろ変わってきたるんだなあ……」

「はいつ、なんだか最近、自分に自信を持てるような気がしてるんです」

「そいつは向よつ。……んじや、そんな雪歩に俺からのプレゼント

ト」

プロデューサーは、持っていた袋をつきつけに来た

「え？」

「十一月二十四日。雪歩の誕生日だろ？神様の誕生日と一緒にはす
ごじ偶然だよなあ」

「あ、ありがと「びざむすつー」」

「おつ、よかつたら「じ」でつけてみてくれ。」「ははは俺が持つから」

「は、はいつ！」

袋を開けると、それは帽子だった

雪のよつこ真っ白なそれは、頭にすりまつて呑まる

「お、やつぱ似合つた」

「ありがとつじありますつーあの、プロトコーサーつー」

「ん?」

「わ、私、これからもがんばりますねつー」

「ねつ」

聖夜の夜は、更けてゆく

「ちわーつす」

所は変わつて765プロダクション

「あら浅井くん。いつもお疲れ様」

□元のホクロが大人っぽい魅力を出している事務員の音無小鳥さん先輩が『むちむちのふとももがイイ』と言つていたのは、男同士の秘密だ

「あ、小鳥さん。こんちわつす」

「うふふ。いつも元氣でいいわね~」

「ところで、タカさんいますか?ちょっと相談したい」とあるんですけど・・・」

タカさんは、俺の先輩だ

本名を教えてくれなくて、周りがタカさん、タカ君って呼ぶから、俺もそう呼んでる

「ええと、タカさんなら今営業で、もつもつとしたひ・・・あ、ほう」

ガチャ

「お疲れさまでーす。お、真理か」

さつきくぐった扉から入ってきたのは、黒のスーツでバッヂリ決めた若い男だった

「タ力さんーちょっと聞きたいことがあるんですけど・・・
「おう、いいぞ」

一方こちらは文翔学園

「そうか。姫路の転校か・・・」

ちょうど美波が今までのいきさつを話しあえたところだ

「そうなると、喫茶店の成功だけでは不十分だな
「不十分? どうして?」

「姫路の親父が転校を進めた理由はおそらく三つ」

そういうてびしつと指を三本立てた雄一

「まず一つ目。『やとミカン箱』という劣悪で貧相な設備。快適な学習環境ではないといふことだな。これは、喫茶店の成功で何とかなるだろ?」

と、指を一本たたみながら話した

「ふたつ目は、老朽化した教室。これは、健康に害のある学習環境とこう面だ」

「ひとつは道具で、ふたつ目は教室 자체ってこと?」

「そうだ。これに関しては喫茶店の成功程度の収益じゃ厳しい。教室の改修ともなると学校側の協力が不可欠だ」

またひとつ指をたたんだ雄一

確かに、設備程度だつたら僕らがお金を出し合えば何とかなるしかし、教室は学校のモノだ。勝手に改装するといつ訳にもいかない

「そして最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまりは、姫路の成長を促すことのできない学習環境といつことだ」

部活とかでもそうだけど、自分のレベルアップには周りに自分と実力の近いものの存在が重要となる

学年次席クラスの成績である彼女が、最低ランクであるFクラスにいる限りそんな相手は望むべくもない

「じゃが三水ならびひじや？　あやつ、期末では首席じゃったと思うのじやが」

「やうだな、アイツなら足しにはなるだろ？　が、親父さん達が知るトでも思うか？」

「それもやうじやのう。それで、その三つの問題をどうやって解決する気じや？　一つ目はともかく、二つ目、三つ目は難しいのではないか？」

試合戦争なら、全ての問題が一気に片付くのに、ひとつになると厄介だ

「三つ目についてはすでに島田と姫路で対策を練っているんだろ？」

「うそ。この前、どうしても瑞希に頼まれちゃったからね」

「なによし。で、最後に残った教室の問題だが・・・これは学園長に直訴すればいいだけだろ」

さも当然と言わんばかりの雄一の態度

「それだけ？ 僕らが学園長にいつたぐらいで何とかしてくれるかな？」

「あのなあ。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすのなら、改善要求は当然の権利だ」
もしそれでいいのだったら、全ての問題は解決の見込みがあるということだ

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも立てといてくれ。ついでに鉄人を見たら俺たちは帰つたと言つておいてくれ」

「アキ、しっかりやつてきなさいよ」

「オッケー。任せといてよ」

美波の声援を受け、僕らは学園長室を目指して教室を後にした

「へえ。お前、自分とこの学校から仕事取つてきたのか
「はい」

腕を組んで、真剣に聞いてくれる先輩

「まあ、学生は流行に敏感だからな。うまく立ち回れば人気も上

がるんじゃねえか?」

「それに、ウチは企業からの注目度もある学校ですので、ひょっとしたらCMに使ってくれるようになるかもしないと思つて」

「ふーん・・・。ま、アイドルに限らず、人を相手にする職業はイメージ一つでがらりと変わるからな。成功させたいなら、そいつくんにも気を遣えよ」

「ういっす

うなずきながら、どこか嬉しそうにしている先輩

「それで、俺に相談つてなんだ?」

「今回起用するアイドルについてです。ウチのユニットだけじゃ一人分余るので、『Luu ciel』から一人・・・

「人数は四人か」

あいに手を当てて、暫く考えを巡らせる

ちなみに、『Luu ciel』といつのは、タカさんが担当しているユニットの名前である

フランス語で空という意味のそれは、千早、貴音、響で構成されて

いる

なんでも、『千早が空、貴音が月、響が太陽』だそうだ

「日時は?」

「ちょうど一週間後です」

「・・・すまん、その日ライブだ」

頭を搔きながら、先輩はそう答えた

「分かりました。じゃあ『Shining Star』の方は?」

これは、美希をリーダーに、やよい、真美で構成された中学生ユニット

タカさんの仕事量は、単純に俺の一倍。過労で倒れないか心配です

「ライブあるから、そつちはレッスンだ。俺は見れないけど、律子が竜宮小町と一緒に見てくれるっていつから」

「じゃあ、そこから一人いいですか？」

「もちろんだ。で、誰にするんだ？」

「そうだなあ・・・」

「じゃあ、美希で」

やよいと真美を、ウチの学校に連れて来てみよう

Fの連中が野獣 もとい、（変態）紳士になりかねない

そうすると、野獣になつてもかわし方を知つてゐる美希がいいだろう。うん。その筈だ

真美はかわすつていつか遊ぶだからな、收拾付がなくなる気がする

「ウイ。律子や美希には俺から言つとくから、お前はスケジュール調整でもしてくれ

「うひつす。ありがと「ひざこます」

一礼して、各自自分の事務仕事を始める

765プロ（後書き）

書き始めて気が付いた事が一つ

うまく混ぜられる気がしないっ！

暫くは分離状態です。はい

混ぜるな危険な結果にならないよう、頑張ります

ひとりある

清涼祭アンケート

学園祭の出しものを決めるためのアンケートにご協力ください
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものがよいですか?』

姫路瑞希の回答

『家庭用のかわいいエプロン』

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、いい考えです

浅井真理の回答

『男：多少コストはかかるかも清潔感のある上品な服装
女：中華喫茶なので華麗なチャイナドレスで大人っぽい魅力』

男性はカフェのウエイターみたいな格好でしょうか

中華喫茶というのを考えると雰囲気にそぐわない気もしますね
服装は店の印象を決める点でも大切な物ですが、そのあたりのコストが上がれば、収入にも関わってくることを頭に入れておいてください

吉井明久の回答

『ぶらりじゅー』

ブレザーの間違いだと信じています

暫くして、春香、真、雪歩『紅天女』のメンバーと美希がやつて
きたので、今回の仕事について話すこととした

「プロデューサーさんの学校でお仕事ですか？」

トレーニングマークはリボンな春香が尋ねてくる

「おひ。『隗より始めよ』つついとで、いちばん身近なところから
取つて来てみた」

「それで、ボク達は何をするんですか？」

菊地真

ボーカルシユな外見と、さつぱつした性格の女の子
よく、男の子に間違われるらしい

「んー・・・召喚大会に出てもううるさいになつている
「ライブはないんですか？」

星井美希

タカさんも『素質はかなりのモノ』つていづれど
高校生にしか見えないが、れつきとした中学生だ
気がつくといつも寝てる

「ライブも一応、組み込む予定だ」

「ですか。さ、緊張してきちゃいました・・・」

「まあ規模は小さめだから、あんまり気迫うことは無いわ」

「それで召喚大会って何するんですか?」

萩原雪歩

「気弱な所がある、庇護欲を搔きたてるような子らしい
が、ほつておくと穴を掘つて埋まる癖があるので注意
長くなるけど、いいか?」

「問題ないです。何も分からぬまま行くよつずつとましですし」「そつか。じゃあ話すか。文月学園にはな・・・」

文月学園にはな、科学とオカルトの偶然の融合が生み出したシステム、『試験召喚システム』なるものが存在する
登録された人固有の召喚獣を作りだすシステムで

「召喚獣?」

「ああ。このシステムによって生み出される、分身とも呼べる存在だな
これを召喚者は操ることができる。ま、思いのままに操るには慣れ
と集中力が必要だがな

その召喚獣を用いて戦争を行つのが『試験召喚戦争』。略して『試
召戦争』と呼ばれるものだ

「試召戦争・・・ってなんですか?」

「簡単にはいえばクラス間抗争だな。それぞれの教室設備を賭けて戦う

んだ

「クラス設備つて、どのクラスも一緒ですよね？」

ああ・・・言ひの忘れたな。

うちの学校は成績順に6クラスに分かれるんだ
最優秀生徒の集まりがAクラス。こここの設備は高級ホテル並みだ
それから次第にクラスランクが下がるのに比例して設備も下がつて
いくんだ

で、最低ランクに当たるのがFクラス。はっきりいって廃屋だ

「廃屋つて、どんな感じなんですか？」

そうだな・・・腐った畳に、傷んだ卓袱台。傷や落書きだらけの壁
に隙間風が吹きすさぶつて感じだ

しかも、春先にさつき言つた試合戦争に敗れ、腐った畳はござ、卓
袱台はみかん箱

ランクの低いクラスが自分よりランクの高いクラスに勝つと、教室
設備をそのまま入れ替えて、負けたらさらにも一ランク下がるつてい
うワケ

「ぐ、詳しいですね・・・」

一応、俺もFクラスだからな

「うわあ・・・」

コラ美希。バカを見る目はやめなさい

俺は事情があつて試験に出られなかつただけだから・・・

「そ、そりですか？ それで、勝敗条件は何なんですか？」

相手のクラスの成績最優秀者・・・代表を倒すことだな
極端な話、相手のクラスが全員健在でこちらは代表のみだったとしても、その代表が相手の代表を倒せば勝ちってわけ

「なるほど、ありがとうございます。召喚大会もそんな感じなんですか？」

「いや、召喚大会は2VS2の戦いだ」

「ていうことは、ボクらの中で一人組を二つ作るってことですか？」

「そういうこいつた。で、早速明日から操作の練習に入る」

「操作の練習ですか？」

「ああ。さつきもいつたが、ある程度自由に使うには練習がいる。だから、通常レッスンに加えてその練習もやる。帰りが遅くなるから、親御さんにしつかり言つとけよ」

「プロデューサーですよ」

「・・・あんなのは親じやねえよ」

「あ、あの。ど、どうしたんですか？急に落ち込んで・・・」

「あ、ああすまん雪歩」

うちの親は、親と呼べるのだろうか
帰つても暫くは他人扱いだなー

はあ・・・

『・・・』

「ん？なんだその残念な物を見るような眼は？」

「なんでも・・・」

「ないです・・・」

「ないです・・・」

「ははは・・・

「あふう」

くつ・・・なんだか目線が痛い気がする

「とにかく、明日から早速始めるから覚悟しちけよー・今日は解散ー・』
『お疲れさまでした』

「あ、そういう。美希は学園祭まで『紅天女』と行動してもいい。いいか?」

「つよーかいなのつー・」

うむ、よいしい

はいーとあるひより（後書き）

た はい、試験召喚システム周辺についての簡単なチュートリアルでし

準備期間

清涼祭アンケート

学園祭の出しものを決めるためのアンケートにご協力ください
『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

【 ? 可愛らしさ ? 統率力 ? 行動力 ? その他 () 】
また、その時のリーダーの候補も上げてください』

土屋康太の回答

『【 ? 可愛らしさ 】 候補・・・姫路瑞希 & 島田美波』

甲乙つけがたいといったところでしょうかね

浅井真理の回答

『【 ? その他（細かいところに気の配れる人）】 候補・・・姫路瑞希 霧島翔子』

確かに、細かい気配りのきいた店は先生も何度も足を運びたくなる
ものです
先生はよく分かりませんが先の回答といい、お客様を相手にする仕事
に向いているかもしれませんね

坂本雄一の回答

『【 ? その他（結婚相手）】 候補・・・霧島翔子』

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってくれたのでしょうか？

「準備の方は順調かい？」

「はい。おかげで」

「それで、またあたしに用があるのかい？」

一
はい 実は

•
•
•
•
•

「まあ、アンタらのところで賄うならいいんじやないかい？あたし
らからは、場所しか提供できないよ」
「それでも結構です」
「ま、後夜祭とかぶるからあまり客入りは期待できないかもしだ
いけど、いいのかい？」
「もちろんです」
「なら、いいけどね。・・・うまくいくといいねえ」

準備だ。その話、後で詳しく述べるんだし。

『「そうだよ。設備も関わってくるんだし。』

ムツツリー。写真

『「よしひくね』

『「任せひ』

『「雄一、飾り付けはどうするのじや?」』

ここはFクラス

明久、島田、秀吉の説得のおかげで、雄一の指揮の下で喫茶店の設営作業が行われている

「適当に折り紙で輪を作つてつなげとけ。鎖みたいなアレだ」

『「了解じゃ』

『「代表! こんなものを手に入れてきたぜー。』』

そういうて福村が出してきたのは万国旗だった
・・・どっから拾つて来たんだそんなもん

「OK。それも使つとけ」

『「了解した!」』

「・・・使えるものは使つてか?」

「教室がこのままの以上、なんでもいいから少しほそ見栄を張らないとな」

それもそうだな

こんなボロボロなうえに飾り氣もないんじや、来ててくれた人に対して申し訳ない

「問題は、給仕係だよな」

「ウエイトレスって言えよ。まあ、教室の規模を考えると二人でも回せると思つが」

「三人? だれ?」

「姫路と島田と秀吉だ」

「秀吉は男」

「使えるものは使つて」と

・・・頑張れよ、秀吉

『代表、テーブルはどうするんですかい?』

「教室の段ボールを積み重ねてそれっぽく見せるぞ。レースでもかけりや・・・」

「異議あり! 別につきつける証拠とかはないけど異議あり!」

とりあえず、ビシッと真っ直ぐに雄一を指す

「ん? 何か不満があるのか真理。指なんか突き立てて」

「当たり前だ。仮にもここは食品を扱う場所だぞ。衛生面は徹底しておかないと」

「大丈夫だろ。レースで隠れるように調整すれば・・・」

「めくつて見た人がどんな反応をするか考えてみる」

「胸にしまっておいてくれるだろ。学園祭ごときで喚くバカはいないだろうし・・・」

甘いぞ。砂糖たっぷりのショートケーキに煮詰めた砂糖水かけてさらにチョコレートでコーティングしたくらい甘いぞ

ん? それって食えるのか?

「雄一、お前詰めが甘いってよく言われるだろ?」

「お前にな」

『『喚くバカはいない』つていつたって、『だらう』の時点で可能性としてはゼロじゃないんだ。飲食店に限らず、人を相手にする職

業つていうのはイメージ一つでがらりと変わるぞ？成功させたいなら、そういうところにも気を配らないと

「・・・」

「だから、そういうた可能性は徹底的に排除しておべきだと思つんだが？」

雄一は眼を白黒させている

おれは、なんか変な事言つただろ？

「・・・まあ、一理ある。じゃ、お前が責任をもつて調達してこい

「了解した、代表サマ」

「サマとかいうな気持ちわらい・・・」

やっぱ、タ力さんの話はためになるなあ

鉄人なら、生活指導以外にも備品整備とかやってたな

冬休み直前、手がかじかむ中運ばされたのも、今となつてはいい思い出だ

とこつ」とで俺は職員室に行き、鉄人に協力を依頼した

「なるほど。確かに、そういうことなら段ボールではダメだな。・・・よし、学校の備品からいくつか貸し出すぞ

「ありがとうございます」

「と言つても、俺の権限で貸し出してみやそなものは、Eクラスで使われていたキズモノぐらいだがな・・・問題ないか？」

「もちろんです、みかん箱を積み上げたのよりずっとましです

「そつか。なら好きなだけもつていっててくれ」

やつぱり、鉄人は話が分かるなあ・・・
ほどなくして机をいくつか運びこんで、文化祭への準備は万端とな
つた

ここは夜の学園

体育館には春香・真・雪歩・美希と立会人の鉄人、指導役として俺
がいた

「そいじゃ、操作レッスンを始めるぞ」
『お願いします!』

夜とはいえ体育館。その声は反響して静かな夜を崩す

「あ、あの・・・プロデューサー」
「なんだ真」
「よ、夜の学園つてお化けとかでないですよね?」
「苦手だったのか。まあ、お化けが出ようが西村先生見て逃げてく
から安心しろ」
「・・・明日から、吉井の分の雑用もまわすか」

キコエマセーン

「西村先生。召喚許可を」
「分かつた。召喚、許可する!」

召喚フイールドが、不思議な音を立てながら体育館一帯に広がる

「わあ・・・

「これがフィールドですか?」

「そりだ。この中でだけ、召喚獣は召喚できる。んで、こんなふうに召喚するんだ。・・・試験召喚獣召喚、《サモン》!!」

幾何学的な魔方陣が俺の足元付近に現れ、次第に何かを形成していった

形成されたものは、デフォルメされた俺

赤いベレー帽、半袖のアンダーシャツ
ミリタリーパンツにナイフという格好だった
クラ ザーか

「へえ・・・

「ちっちゃくて可愛いの」

「ホント、プロデューサーには勿体ないですよ~」

「・・・それ、どういう意味だ?」

美希には、コスプレしたぬいぐるみにしか見えないんだろうな
俺の召喚獣を抱き上げる

「・・・」

「プロデューサー。どうしたの? 赤くなっちゃって」
「い、いやあ! なんでもないぞ。うん、なんでも」
「そお? なら、いいんだけど」

・・・観察処分者の説明は省こつか

「ねえ真くん。ミキたちも召喚してみようつよー。」

「じゃ、春香ちゃん私たちも・・・」

「うん、いいよ。それじゃ、いつせーのーでつー」

『サモン!』

今度は四人の足元付近に魔方陣が現れ、召喚獣があらわれた

「あれ? ここの服ってなんなの?」

「おしゃれですか? 戦うわけじゃなさそうですよ?」

「武器も持っていないみたいですね」

へえ、デフォルトってウチの制服なんだ

「あ、うちの制服だね。西村先生、どうこう?」とですか?

「まだ戦争用の調整がされてないんだろ? ま、一、二、三回経てば反映されるだろ?」

「やつですか。ありがとうございます」

組み手とかやりたかったけど、それじゃあ無理だね
とすると、移動とか基本的なことだけでいいか

「それじゃ、簡単な操作からやってみようか」

『はーー』

こうして俺、浅井真理の清涼祭までの日々は過ぎてゆくのだった

準備期間（後書き）

大変です

バカテスを基軸にアイマスを絡ませようと思つたら、試召戦争編で構想が行き詰つてしましました

転入させるのはベタすぎますし（というか現実考えたら全員は厳しい）、かといってバカテスキキャラだけで進ませたら、クロスになります

『アイマス勢が最低一人でもいればよい』ならば、案はあるのですがそれってクロスって呼んで大丈夫なんですかね？

作者自身、結構手探りなので感想や要望があればお願いします

清涼祭

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「そういうやつだよ。あいつは」

ホント、いつ見てもあいつは火がつくとすごい

清涼祭初日の朝

俺らのクラスは小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた

と言つても、壁を見ればどれだけボロボロなのかは一目瞭然だがな

「カーテンみたいなものでもかけて、壁隠せばよかつたかな？」

「いや、逆手にとれるかもしれないぞ？」

「え？」

「逆に考えるんだ。『こんなボロボロの教室なのに喫茶店かあ。相当衛生面には気を使つてるんだろうな』って思わせることもできる

「実際、使う机や教室も徹底的に掃除したもんね」

「ああ。後ろ指を指されるような部分はすべて排除したつもりだ・

・後は、接客や料理次第だな」

厨房はムツツリー二が指揮を執つてゐる

あいつも確か火がつくとすごい人間だったよな

・・・Fクラスつて状況次第では天才になりうる奴らばかりだな
誰かいつてたつけ。『バカと天才は紙一重』つて

「それにしても、秀吉。よくこんな綺麗なクロスを持ってきたな」「うむ。ワシも力になれるようなことがあって嬉しかったぞい」

このクロス……ひとつとして演劇部の小道具だらつか
そつすれば結構上質な生地である」とも説明がつく
シミができるだけのことが

「室内の装飾も完璧だし、これならまくいくよね」

万国旗が気になるが、学園祭としては充分なほどの完成度だな
これなら満足は満足するものとなるだろうな

「……飲茶も完璧」

「おわづ」

「ひと。相変わらず、気配を消すのが上手いな。ムツツリー！」

田常からしたことをしてるのは修行だらつか
忍者にでもなる気なのか？

・・・いや、コイツは隠し撮りのためか

「ムツツリー、厨房の方もオーケー？」

「……味見用」

出て来たのは、胡麻団子だった

「わあ……おこしそう」

「土屋、これウチらが食べちゃつていいの？」

「……（口クリ）」

「では、遠慮なくいただいつかの」

「んじや、俺も貰うわ

ムツツリーの胡麻団子、作りたてのかあったかい

勢によく頬張つてみると

「お、おいしいです！」

「確かにな……表面はカリカリで中はモチモチ。それでいて甘つたるくないのがいいな」

他の試食者を見てみると、姫路と島田はトリップしていた
・・・まじかよ。これなら料理の方は万全だな

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、
辛すぎる味わいがとつても……んゴパフ」

「明久あつ！？ 口からありえない音がしたぞ！？」

秀吉は早く明久を蘇生！

「りょ、了解じや」

秀吉の蘇生により、明久は一命を取り留めたようだ

「ふう・・・一時はどうなるかと思つたのじや
「う・・・うーん？」

ああ。よかつた

「ムツツリーー、毒を盛ったのか！？」

「いや・・・そんなはずは・・・ハツ！」

「どうしたんだムツツリーー？」

「俺が作つた胡麻団子は4つ・・・ひとつ多い・・・

『ま、まさか・・・』

ギギギとでも音がなりそうなほど強張つて、三人が姫路を見た
まだトリップしているみたいだな

「姫路がどうかしたのか？」

「ああ。 真理は知らないんだつたね」

「何をだ？」

「・・・世の中、知らない方がいい事は結構ある

まさか、姫路が作った胡麻団子とでも言いたいのだろうか
いくらなんでも食べた瞬間倒れるような料理なんて、毒を盛らない
限り作れるわけがないだろう

作つても黒コゲとかの方が説得力がある

姫路がそんな危ないものを使う訳もないだろうし・・・

「うーっす。 戻ってきたぞー」

「お、雄一か。 どこ行つてたんだよ」「

「ああ、ちょっと話し合いにな・・・」

珍しく歯切れの悪い返事だな

何かを隠しているのがモロバレだぞ

だけどあいつが隠すことつていうのは大抵不器用から来るものだしな
言及はしないにしどうか

「そうですかー。 それはお疲れさまでした」

「いやいや、気にするな。 それより、喫茶店はいつでも行けるな?」

「バツチリじや

「・・・お茶と飲茶も大丈夫」

あの卒倒飲茶がまだあるかは確認のしようがないが・・・
せめて食中毒がうちからでないことを祈るう

「よし、少しの間、喫茶店は秀吉とマッソリーに任せろ。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？ あんたたちも召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あつてね」

色々あつて・・・か

「もしかして、賞品が目的とか・・・」

「やめとけ島田。色々って濁した以上、大方答えられないような事

情でもあるんだろ」

そうでなきや、バカコンビで参加する必要性がわからない
へタしたらとんだ恥さらしだしな

「う・・・」

「そう？ ・・・なら聞かないでおいてあげるけど・・・」

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「う、うん・・・」

そういうて、二人は教室をあとにした

「なんか、真理にはなんでもお見通しつて感じだね」
「そういうトコ鋭い奴だからな。それでいて、自分の隠し事は何一ついわねえ」
「そりいえば雄一、あの時学園長が『神童』がどうとかいつてたのつて」

『さすがは神童と呼ばれていただけのことはあるね。頭の回転はずまずじゃないか。ま、礼儀はもう一人の方がいいがね』

この間交渉に行つた時、そんなことを言われたのだ

「・・・」

「もう一人つていうのはもしかして・・・」

「・・・行くぞ。ホントに一回戦が始まつちまつ

「あ、うん・・・」

どうも、喋りたくない所に触れちゃつたみたいだつた過去に何かあつたんだろうか・・・

「さてと、それじゃ、俺もちょっと離れるぞ」

「どうしてじや?」

「ちょっとH-Sコートしないといけない人たちがいるんでね。俺がこつちにいれる時間は少ないかもしれないけど、任せたぞ」

「了解なのじや」

「あと、他の奴らには黙つといてくれ。後でうつさこから

「分かつたわ」

「それじゃ、喫茶店の方任したぞ。時々様子見に来るからな」

とにかく、機材の準備しないとな・・・
裏方として忙しい学園祭になりそ娘娘

「浅井は何なの？」

「でも準備を積極的にやつてくれたのは真理なのじゃから、少しうらいの暇は許してやつてくれんかの？」

「そうですね・・・それにしても、一体誰をエスコートするんでしょうが？」

「エスコートなんて言い方するのじゃから学園外からの女性、ということは間違いないと思うのじゃが・・・」

「そういえば、今日つて外部からアイドルがくるんだったよね」

「そうでしたね。それで、召喚大会の方にもゲストで参加するんだ

そうですね」

「空いた時間は、きっと清涼祭を楽しむのじゃうな

「だろうねー。いいなあ」

『かひか』

華のある裏方

「照明などはここからお願ひします…」

「ふう。機材搬入も楽じやないね…・・・意外と重いし

「あ、プロデューサー。おはようございます…」

「お、真。早いな」

「えへへっ。プロデューサーの学校つていうからボク楽しみで…」

そいつは嬉しいな

「プロデューサーさん、私たちもいますよ

「お、おはようございます」

「おはようなのっ」

「まあ、来てくれたのはいいが、お前たちの試合まで結構あるぞ」「それじゃ、一緒に回りましょうよ！」

「ああいいぞ。だつたら・・・すいませーん…アレ出してくださーい！」

『はーい…』

衣裳さんに頼んで、この日のために用意しておいたあれを出す

「あれ・・・つてこれですか？」

「そそ。文月学園の制服」

先人はいつた。『木を隠すなら森の中』と
なら、人を隠すなら人の中。アイドルを隠すなら一般人の中・・・
とこう訳だ

結構高かつた・・・

「四人とも、これに着替えてこい」

「はーい」

タダイマキガエチュウ・・・

「着替え、終わりましたっ」

「わ、私も・・・」

「サイズもぴったりだし、結構いい感じなの」

「・・・」

おー、にあつてるじやないか

特に春香なんてもう一般の生徒と見分けがつかないくらいに

「あの、プロデューサー」

「ん? どうした真?」

「何でボクだけ男子用なんですか?」

「いや、真ならこっちかなつて・・・いやか?」

「いやです! ボクも女の子用のほうがいいです!」

そりこりと思つたよ・・・

「えー。でも真くん。それ似合つてるよ?」

「え」

「うん。真ちゃんは、そっちのがいいって思つよ」

「えー・・・っと」

「俺からも、ひとつ頼む」

女子4人と男子1人だつたら、見せかけだけとはいえた女子3人、男

子2人の方が歩きやすい
おもに俺の心としては

「ほんとはボクだって女子用の着たいのに・・・」
「ホントすまん」

しぶしぶ承諾してくれたようだ

まあ、一般思考としては『アイドルがウチの制服、しかも男子の着
てるとかあり得ない』って感じだろうから、自然にいれるだらうし

「それじゃ、設備の搬入も終わつたよつだし、ちよつと回りつか。
はぐれないうつな」

『はーい』

「んじゅや、どこから回る?」

「ボクはプロテコーサーのクラスが良いですー」

「え・・・まじ?」

「はー! 混雑しないうちに行きましょー!」

「ショーがないなあ・・・」

とこいつといたまた戻つてきました『中華喫茶ピーローラン』

「こりひしゃいませ・・・つて浅井くん?」
「おう姫路。調子はどうだ?」
「はい。始まつたばかりなので何とも言えませんけど、まだしづか
調べみたいです」

みたいだな。空席よりも人のいる席の方が多いみたいだ

「ところで浅井君。・・・後ろの四人は？」

「ああ。俺がエスコートする事になつた後輩四人」

『こんにちは』

「ふふつ。こんにちは。では、お席の方まで案内しますね」

どうやら俺のことはお密として扱つてくれるようだな
さすが姫路

「でも、エスコートなんて言つから、私てつまうアイドルの子たち
かと思つてましたよ～」

『つー?』

「まさか。俺なんかがアイドルと縁があるわけないだろ？」

「それもそうですよね。メニューはこちらになります。ご注文が決
まりましたらこのベルでお知らせください」

そういつて姫路は去つていつた

「プロデューサー・・・何やつちやつてるんですか」

「いや、まさかエスコートなんて言つて方でそこまで核心をついてく
るとは思わなかつた」

姫路瑞希・・・恐ろしい子

「んで、なんにする?」

「ボクは杏仁豆腐とウーロン茶で」

「じゃあ私は胡麻団子でも」

「わ、私はあんまんを・・・」

「ミキも、真くんと同じので」

ガタン！

突然大きな音がした

「おいおい、んだよこの机！傷だらけじゃねえか！こんなもんで料理を出そうっていうのか！？」

「この点心もくそまずいし、やっぱアホどもの『クラスだな！』

おいおい、学園祭にクレーマーかよ・・・
みかん箱じゃなくてよかつた

「あの、お客様・・・」

「ああん？どうでもいいから、さつさと代表者を呼んで来い！」

「こんなチャチなモノで金を取ろうなんてふざけんじゃねえ！」

タチの悪い奴らだな

「うう・・・」

「雪歩、大丈夫だよ」

「・・・真。ちょっと雪歩見ててくれ」

「は、はい・・・分かりました」

席を立ちこいつそりと奥の方に戻る

「あ、浅井っ。アンタ今までどこに・・・

「シーッ。とりあえず秀吉は坂本に、島田は鉄人にこのことを伝え
にいつて」

「わ、分かったのじや」

「う、うん」

「あと、お前たちは『割引券』を今いる人数分作っておいてくれ
『何故だ?』
「こんな迷惑をかけてしまったんだ。それぐらいは店からもサービス
しないと
『そういうことなら・・・』

駆け出していく秀吉と島田

・・・よし、上手くいくかはわからんが、代表が来るまで時間稼ぎ
と行こうか
俺だってFクラスなんだし、これくらいはしたつて誰も文句言わん
だろ

「さつさと代表者をよべよ!」

「それとも弁明の余地がないから出てこないのかあ?」

好き放題言つてくれるな・・・

「お客様、いかがなさいましたか?」

「ああ? お前が代表者か?」

「私は代表代理です。代表は召喚大会に出場中のため現在この場にはおりません。只今、係の者に呼びに行かせてします」

「けつ。はつつけたような敬語使いやがつて」

「・・・それで、このような非常に迷惑な行為をなされた理由を、お聞かせ願いたいのですが?」

ホントムカつく奴らだな
雄一だつたら『パンチから始まる交渉術』とか言って殴りかかりそ
うだな

「はつ！見ての通りだ！んだよ、この汚ねえ机！」

「おまけに点心もマズイ！なんんで金取るうとしてんじゃねえよー。」

「・・・それだけですか？」

「それ以外に何があるってんだよー。」

・・・それだけか

「お言葉ですが」

『なつ・・・』

「壁やその他設備を見てもらってもお分かりになる通り、こここの設備は他のクラスよりも飛び抜けて貪相な設備となつております」

「そりやそうだろう！ なんたつてバカどもの集まりのFクラスだもんな！」

「最近試合戦争にも負けたらしいしなー。」

そういうて、ガハハ笑いだす一人

「確かに、Fクラスの連中はバカどもかもしません。ですが、そのバカどもが必死に知恵を絞りだしてこの喫茶店を始めたんですね」

黙つて聞いてくれるようだな

ここで喚きだしたら一発殴つてでも聞かせたところだつたな

「貧相な設備であるFクラスで食品を扱うということは、衛生面などの問題が山積みでした。それを、Fクラス一同なんとしても成功させたいと考え、一丸となつて問題を一つ一つ解決していくのです」

「だ、だけどよお・・・」

坊主の方が何か言おうとしたようだが、声を張り上げて遮る

「そして、あなた方が傷だらけで汚いといったその机・・・実はFクラスのものではないのですよ」

『はあっ！？』

「お恥ずかしい話ですが、Fクラスの机はみかん箱です。そのようなもので大切なお客様方に食べ物を召し上がっていたくことなど、出来るわけがないじゃないですか。だからこそ先生方に頭を下げて、無理をいって備品を借りたのです」

「・・・」

「そのあと、一つ一つを全員で丁寧に磨きあげたのがその机です」

『ひ、ひるむせえつ！』

あー。ホントにひるむせえな

「・・・そりそろ、ひるむせえのはあなた方のほうである」とを自覚したほうがよいのではないでしょうか？」

『なっ・・・』

「ひひひで、外野の声を聞いてみよつじやないか

『そうだ！』

『一生懸命手間をかけて準備してくれた子たちに申し訳ないと思わないの！？』

『それにこここの点心だつてかなりうまいじゃないか』

『あんたたちは一体何が気にくわかなつたつていうの？』

『ひべぐ・・・覚えてるよつ！』

駆け出したクレーマーの一人

しかし、入口にいた大きな男にぶつかり尻もちをついた

「どこに行こうというんだ？ 常村、夏川」

『げえつ！ 鉄人！』

ナイスタイミングだ鉄人

「文化祭で営業妨害をやらかすのがうちの3年、しかもAクラスの奴だと思うと頭が痛いな・・・」「は、放せっ・・・」

「ふ、ふりほどけねえっ・・・」

「とにかく、お前たちを指導室に連れていくぞ。どうしてこんなバ

力なことをやつたのか、聞きだす必要があるからな・・・」

『いやだああつ！』

あの一人、常村と夏川。面倒だから常夏コンビで良いか・・・は、そのまま鉄人に引きずられていった

「大変見苦しいものをお見せいたしました。不快な気分にさせてしまつたというお詫びとして、係の者がお配りしています『割引券』を提示していただけますと合計金額より一割、割引かせていただきます。このような対処しか我々ではできることはありませんが、何卒御容赦願います」

とりあえずこの場は収まつたか・・・

鉄人の城である指導室に連れてかれでは、しばらくあの一人も身動きとれまい

「ん・・・」

割引券が配られないままに席を立つ人間がいた

ありや、教頭じやねえの？

何だかアヤシーな・・・

華のある裏方（後書き）

真理は両手に花びらるか、そのつち持ちきれなくてあたふたするんじゃないでしょうか

とこうか、複数のアイドルを同時に扱つのは難しいですね
暫くは真理 + @の一対一な感じになると思います

とりあえず、異端審問にでもかけられればいいと思っています

樂あれば苦あり

「さて・・・真理」

ふとそこを見れば、雄一と明久がいた
で、首根っこ掴まれて裏へと連れてかれた

「てめえ・・・いきなり出てきて、何かつてに割引きとかしてんだ
?」

独断専行だもんなあ。そりや怒られるわ
ホウレンソウは仕事の基本だつて言つてたしなあ

「当然の処置だよ。クラスの利益は落ちるけど、迷惑をかけたせめ
てもの償いだよ」

「殴つて黙らせれば早いだろ・・・」

あ。」いつが来る前にコトが終つてよかつた

「そのあと、『代表は暴力を振るつ』なんて悪評が流れたらどうす
るんだ?」

「考えすぎだつて・・・」

「いいか明久。人を相手にする仕事に考えすぎとかそういうのはな
いんだぞ・・・イレギュラーなことにも対処できるようにしておい
て損はないぞ」

「まるで、人を相手にする仕事をやつたことがあるかのよつた口ぶ
りだな」

実際やつてるし、心遣いも聞いている

「まあ。たしかに、もめごと後の事後処理としては悪くはないと思つた。客も割引に目が眩むだらうし」「だろ？」

「だが、割引いた分の額は、お前から徴収する」

「はあつ！？」

「現場監督は、何事にも責任を負う。それこそ、血しづか起こした不利益についてもな」

「うう・・・仕方ないな」

今月、生きていけるだろ？

「一割といつてもこの人数だ。結構な額持つてかれる気がする

「いやーそれにしてもかつこよかつたですよプロゴトコーナーー！」

しかし、割引された額については俺の負担

・・・明後日には、お財布の中では木枯らしが吹き荒んでいるだらう

「あの小悪党にビシッと言えるなんて流石ですねー！」

「ん？ ああそつか？」

でも正直あれは誇大表現を使つたしなあ・・・

一生懸命準備したと言つても他のクラスよりはずつと短い。何たつて野球してたんだからな

それに、成功させたいとは思つても、どうしてもと考えている

のはほんの一部だし……
机についてだつて実は軽く水拭きした程度だし

「でも、衛生面に気を使つてゐるなり、安心して食べることができるま
すね」

「お昼もあそこに行きたいです」

「そ、そうか？ 気にいってもらえたようううれしいが、どうも時間
みたいだな。春香と雪歩は出場準備だ」

「「はいっ」」

「じゃ、真と美希は自由に回つてもいいし、俺たちが戻つてくる
までここに居てもいい」

「わかったの！」 「はい」

「んじや、各自行動開始」

といふ事で、春香と雪歩を引っ張つて、特設ブースへと急いだ

「ねーねー真くん。何してよっか？」

「そうだねー……美希はなにがしたい？」

「んー……。ミキね、真くんとならどこでもいいかなつて

『……今日の召喚大会に出るゲストアイドルつて星井美希ちゃん、

菊地真、萩原雪歩、天海春香だけ？』

『ああ。俺すっげえ楽しみでさ、夜も眠れなかつたよ

『でもさ、美希ちゃん以外あんまりきかない名前だよな？』

『確かに……だが、アイドルだぞ！？アイドル！』

『やっぱり、来てくれるつてだけでもテンションは上がりりますなあ』

「・・・ボク達、まだまだみたいだね」
「ミキ達は、結構人気みたいだね」

『おい、あの子、美希ちゃんに似てないか?』
『まさか、さつき浅井が連れてきてた子だぞ? あり得ないつーの』

『・・・最近の行動には不可解な点が多い。だが、今のところアイドルとの関係について情報は掴んでない』

『じゃあ、やっぱり他人の空似かなあ・・・』

『夢を見てるな。ウチの制服着てるわけもないだろ』

「・・・だから、プロデューサーは制服に変えたんだね」

『案外ばれないんだね~。なんか、こいつ、ここにいるぞ! って叫びたくなるよね』

「や、やめなよ美希・・・」

『とりあえず、浅井は処刑だ』

『級友を処刑するのは忍びないが。我らFFFの血の盟約に背いたからには致し方のないことか』

『また。モテナイあいつがどこからあんな可愛い子たちを連れて来たか聞きだしてからだぞ』

『・・・だが、今は設備が大事』

『それもそうだな。これ逃したらあと3ヶ月はみかん箱だし・・・』

『清涼祭の打ち上げの時にでも』

「・・・ねえ、真くん

「なに、美希?」

「ミキね、もう自分から正体ばらしたりしない

「・・・うん。それがいいと思う。じゃ、行こうか?」

「うん！お代は、プロトコ……真理くんにつけて欲しいの…」

『真理コロス…』

「さて明久。俺たちも店の手伝いやるぞ」

「真理が勝手に動いた分、僕らでもとつ返さないとね。それって…」

「・」

そうじつて、僕らは店の手伝いに回りつつ立ち上がる

「あの、坂本くん、明久くん…」

「なに？姫路さん」

「あの…真理くんの連れていた子たちのことなんですかけど…」

「・」

「ふう…」

「あー…疲れたあ

「おめでとせん」

二回戦は見事勝利

操作ついでに補習やつといてよかつた…

「やつぱり、プロ『リーコーナー』さんの指導のおかげですよ」

「・・・出来れば、真理でよんでもくれ。あんまり感づかれたくないから」

「わ、わかりました。じゃあ・・・真理くん!」

「おう、いいじゃねえか」

「えへへ・・・」

「それで真理さん。私たちほぞうするんですか?」

「んー・・・美希と真と合流しようとか」

Fクラスにいくと、そこ元真と美希はいなかつた

「自由行動OKって、俺言つたからか・・・」

まあ美希はともかく、真は真面目な方だからそいつを守つていてる訳
なんだが・・・

「おい、浅井」

「ん? なんだ福村?」

「黙つて死んでくれ!」

「はあつ!?

そういうつて、グーパンチしてくる福村
腕をつかみ、足をかけて転ばせる
なぜ、俺が殺されなくてはならない!?

「ぐつ・・・今は接客で忙しいが、後夜祭の時、覚悟してろ

「・・・俺、なにしたんだよ」

「つぬせこつーとにかくお前へのツケだ!しつかり払え!」

「あ、ああ・・・」

領収書を受け取り、さつと田を通す

・・・って

「7200円！？いつからここは高級料亭になつたんだ！？」

「・・・一割負担分と、免罪費」

「はあつ！？なんだそれ！？」

財布には、木枯らしも吹かなくなつそうだった

「・・・『愁傷さま』です」

「へ」

ここは召喚大会会場

なんでも大会のためだけに特設したステージだそうだ

「さて、真、美希。いけそうか？」

「うん！バツチリって感じかな・・・あふう」

「ボクも、結構いける気がします」

うん。そういうつもりだと、指導した甲斐があるつてもんだけ

「そういうえば、テストの方はどうだつたんだ？」

「あ、アレですか？ ちょっと勝手が違つて不思議な感じでした」

文月学園のテスト

時間内ながら、400点だらうが700点だらうが、ビリもでも点数を伸ばせるテスト

「でも、得意なところを集中してやれたので結構出来てると思ってますよ」

「そつか」

「このテストは得意なところは無理に解かなくとも次にいけるそれを上手く使えたようだな
細かい偏りができるしまつ氣もするけど・・・まあ仕方ないか

「春香と雪歩は、三回戦でノマ進めただ。頑張れよ」

俺たちゲスト組は、一回戦からのシード枠として付け足されていたおそらく、四回戦までの肩慣らしどと、（一般公開を）ねだるな、勝ち取れつてことだらうな

「はいなのっ！」

「気合は十分だな。観客席で見てるからな・・・それで、お前たちはどうする？」

「私たちも、プロデューサーさんと一緒にしますね」

「そ。じゃあいくか

そういって、控室を後にした

樂あれば苦あり（後書き）

前回ビギーンと田立つたツケ、なお話でした

最近、連載を始めたこともあってか、久々にプロデュース業を再開しました

アカペラエンドだった難易度ハイパーにリベンジ
構成は千早・響・貴音。とりあえず大賞+部門賞一つ取るのが目標
です

清涼祭大満喫

「緊張するなあ・・・」

「え？ プロデューサーは一般公開は四回戦からっていってたから、別に緊張する必要はないと思うの」

「だからだよ。僕ら四回戦まで行かないと」

「美希と真くんなら、問題ないって思うな。・・・あふう」

そう言って、美希はあくびをする

やつぱり、いつも時の美希って大物だよね

「一回戦がゲストとなんて、ついてるよね。あたしら」

「ほんとほんと。サクッと決めちゃおうよ」

スタンドを見てみると、腕を組んだプロデューサーと、春香が手を振っているのが見えた

「それでは、始めてください」

「真くん、いくよ」

「うん！」

「卯月！」

「有香！」

『サモン試験召喚！』

「始まつたな」

幾何学的な魔方陣が展開され、召喚獣が姿を現す

「なんていうか、真ちやんらしい召喚獣ですよね」

「美希の召喚獣かつこいなあ」

真の召喚獣は空手着を着ている

十文字槍を持つているが、多分剣に対する補助だろう。見た目的に

美希の召喚獣は、黄緑色の衣裳を着ている。美希のステージ衣裳とお揃いだ

両手に拳銃を持っているから、多分中距離派だらう

「そういうえば、美希ってまだ中学生でしたよね？テストは・・・」「英語教師に頼んで、中三用の作つてもらつた。そのとき、何度も高校生じゃないのか訊かれた」

美希は、ぱっとみ高校生っぽいからなあ
オシャレとかに気を使つてゐて聞くし、それで大人っぽく見える
んだろうな

相手の召喚獣は、まあ、一般的な剣と盾だった
珍しく、動きだす前に点数が表示される

765クラス

菊地真 92点

&

Cクラス

島村卯月 127点

1 2 7 点

765クラス

星井美希 144点

VS

Dクラス

飯島有香 87点

8 7 点

765クラス

星井美希 144点

VS

Dクラス

飯島有香 87点

8 7 点

「み、美希ちゃんす」「ですっ！私なんて・・・」

「まあ難易度の差もあるし、美希は基本からしていろいろとすごいからな」

「あ、動きだした！」

まずは向こうからの先制攻撃

どうも、一対一に持ち込む作戦のようだ

「まあ、武器の相性だけで見れば問題ないだろ？な」

「え？ そうですか？」

「そりやそりや。銃と剣なら間違いなく銃の方が強いし、槍と剣なんかには『剣術三倍段』なんて言葉もあるくらいだしな」

「『剣術三倍段』？」

「よくは知らんが、剣術で槍術に勝つには三倍くらいの努力がいるつてことらしいぞ。まあ、初心者VS初心者なら長物の方が有利だろってことだ」

「ふーん・・・」

まあ、戦いは武器の相性で決まるもんじゃないけどさ
技量は大体どつこじでつこいだから、まあ問題ないか

大したどんでん返しもなく、あつさり低い方を倒した美希が、眞の
サポートに入つて三回戦出場を決めた

「おつかれさまですっ！」

「おつかれさまの・・・あふう」

「おう、おつかれ」

相変わらず、美希はマイペースだなあ

夕力さんは手なずけてるんだろうか。それとも振り回されてるんだ

るうか

ふと先輩が頭をよぎったが、すぐに消す

「ああ～・・・緊張した」

「いい動きだつたぞ」

ほっと胸をなでおろす真に、言葉をかける

「やうですか！？ありがとう」「やこますっ！」「やー、槍なんて持つ

たことなかつたら、自信なかつたんですね」

「そうか？だつたら槍捨てて格闘でいつてもいいんじゃないかな？」

「え？いいんですか？」

「いいも何も、お前の好きにやってみればいいだけだ」

俺、槍術なんて知らんからあーだこーだいえるわけもないし
結局好きにやらとしか言えないんだよな

「あの、プロデューサーさんっ！次まで時間ありますし、せっかく
だから清涼祭を楽しみましょうよ！」

「お、ここだ。じゃあビートに行へ?」

「ハサ、プロトコーサーの行きたいことハビト行きたい!」

「うえつーが、また面倒な……

「プロトコーサー、僕達をひやんとHスコートしてくだれこよ?」

「……つよーかいだ」

俺、コイツらに勝てる気しねえ

「ひ、ひう……な、なんでこきなじこんなとこハビト?」

「わつき飯食つてたから、まだいいかと思つて」

「あ、穴掘つて埋まつてたいです……」

『『はああつー』』

「うわあつーああ……びつづした」

「…………」

あれ?悲鳴が聞こえない?

ちょっと氣になつてそつちを見てみれば、かちりけくなつた雪歩が
いた

「ゆ、雪歩?おーこ・・・

肩をゆすつてみたりもしたけど、返事がない。ただの

「さやあああああつ…………」

「「「つわああああつー?」」

いきなりの大音響に、お化け役の先輩共々驚いてしまつ

「お、お化けが・・・お化けが・・・。ふ、プロデューサーあ。もう出ましょつよお」

ここにきて不意打ちの涙目 + 上田遣い

なんでだろ? ものすくべ申し訳ない気持ちになつてきた

「わ、わかつた。俺が悪かつた。だから泣きやんでくれ? な?」「ぐすつ・・・じめんなさい」

途中、何度もお化け役の人と鉢合せしたが、そのたびに雪歩は大音響で叫んだ
ばつたばつたとお化け役の人をなぎ倒しながら、雪歩と俺は出口へ
とたどり着いた
今度からは、自重しよつ

すいません、先輩の皆さん

「プロデューサー。ニキおにぎり食べたいの」
「突拍子もなく言つた。米使つてる場所はあつても、多分おにぎり
は売つてないんじやないかな?」

「それでもここ。ミキにも考えがあるからね
「・・・?」

で、いわれるままにやつてきました定食屋
・・・この本格セット、学園祭の域を超えてい
つーか、学園祭で定食屋とか渋いな

「いらっしゃい! お席の方は、いらっしゃになつます。『注文は・・・
「店員さん』
「は?」
「ミキね、店員さんの作った、特性おじぎりが食べてみたいな。
・ダメかなあ?」
「かしこまりました! 今すぐ作らせてもらひこまへす!」

まさかの色仕掛け

俺もみんなも畠然としている

とこうか、あつさじひつかかるなよ店員A

『ちよ、光何やつてんだ! ?』

『特性おじぎりの注文が入つたんだ! 俺は、これを作らなつといけ
ないつ!』

『はあつ! -?』

・・・ウチの学園つてバカばっかなのか?

「おじぎつおじしへのつ! -

「プロデューサーさんつ。次どこに行きます?」

「んー・・・。あ、あれなんて」

「ああつ! ケーキ屋さんだ! 行きましょ! つむー。」

「へいへーい・・・」

とこう訳で、今度はケーキ屋に入った

みんなそれぞれ食べたいものを注文している

「やつぱりケーキっていえばイチゴのショートですねー。」

「そうか? ジヤあ、俺も一つ」

春香に倣い、俺もイチゴのショートケーキを注文する
真っ白なクリームの上にイチゴが一つ、雪化粧をしていた

「はむつ・・・つー? なんか面白い味ですー。」

「へえ。ぱくつ これって、塩か?」

「塩・・・ですか?」

「そ、お汁粉とかじや、ついでに塩を少し入れると、甘さがより引き立つらしじぞ」

最近の塩スイーツとかも、多分そんな感じなんだろうな

「へえー・・・。今度、家で作ってみようかな

「春香つて、ケーキ作れるんだ」

「はい! ケーキだけじゃなくて、クッキーとかアップルパイとか、
お菓子だつたらいろいろ作れますよ」

「ふーん・・・。

お菓子作りつて分量はかるのが大変つて聞くぞ

普通の料理みたいに『ぎりぎり切ってドーン』って出来ないから、俺には無理かもなあ

「そっか。今度、食べてみたいな
「じゃあ、今度作つて事務所に持つていきますね
「おひ。楽しみにしてるぞ」

「くへっ、プロデューサーつ。次は僕の番ですよー。
「順番とか、あつたんだ・・・」
「それじゃ行きましょー!」

とこう訳でやつてきました、2-A
雄一の大好きな翔子がいるところだ
といつか結局、俺の要望一つも通つてねえや

「えーと、お店の名前は『』主人をまとお呼びつー。か。・・・誰
のセンスだ?」

少なくとも、翔子じゃない
なんというか、この人つて印象が

「『』、執事＆メイド体験ができるらしいんですよー。パンフレット
にありました!」
「へー・・・・で、それをやりたいと
「はーつーじゅ、ふりふりのメイドさんの服を着て、僕の女の子ら
しゃをアップさせるんです!」

「……そつか。じゃあ、入るか」「はいっー！」

ところ訳で、入店した

「……おかれりなさいませ、『主人様』

「お、翔子。似合つてゐるな」

入店を迎えてくれたのは翔子だった

「……ありがとつ」

「え？ プロデューサーの友達ですか？」

「ああ。霧島翔子、一年の首席で俺の幼馴染」

「へえー……。あつ！ 僕、菊地真つていいます！ それで、右から

天海春香、萩原雪歩、星井美希。よろしくつー！」

「……よひしべ」

そうこつてお辞儀をする翔子

元々清楚なイメージあるからかな。様になつている
雄二|でなくともイチコロだな

つーか、今さらうつと……

「……真理。この子たちは、ひょつとして今日来るアイドル？」

「あ」

「『あ』じゃないぞ真。まあ、自己紹介自体は悪くは無いけどね」

翔子じやなきや、ひょつとした騒ぎになつてただらつた

「まあな。とこつか、お前つてところの興味あつたんだ？ 雄二

直線だとばかりに

「・・・学園中で話題になつてた。星井美希が来るつて」

あれ？他の三人は？

「まあ、しょうがないか・・・。ところで翔子。出来れば秘密に
「・・・分かつてる」

「流石、こういう時に頼れるのは」

「ただし、今度雄二を捕まるのを手伝つてもらひ」

不細工な悪友一人と、いろいろな意味で大切なアイドル
心の天秤がどちらに傾くかは、明白な事だった

「抜かりねえな、翔子。それと、執事＆メイド体験希望者がいるん
だが・・・」
「・・・分かりました。では、お席の方へ案内します。」希望の
方は、そのあとで私についてきてください」「
「はいっ！」

素早く営業モードに切り替わった翔子に、真を預け、席に座る

「すう」ところだね
「だよなあ。流石Aクラスの教室つてところだよな
「ええつ！？」、「教室なんですか！？」そういえば、どこか高級ホ
テルのような・・・」
「ウチの事務所よりも、豪華な気がするの。あふう」

まあ、ラウンジやシャンデリアのある事務所なんてそういうないだろ
逆にそんなところに人を通すとか、嫌味にしかならんとおもうし

「でも、こんな教室じゃ逆に落ち着いて勉強できない気が……」「こんな中で集中してやれるから、Aクラスはエリート集団なんだろ？」「うう」

「ふ、ふうでゅーたあ……」

そんな話をしていると、真がやつてきた
ぴっちりした黒いスースがとても似合っている

「僕、メイド服が着たかったのに、霧島さんが……」

まあ、そうなるわな

男子生徒の服着てたし。ああ見えて翔子は強いからなあ、最近

「真ちゃん！すくイイ！すくい！」よー」「

「ミキも、真くんカッコイイって思うな」

「はあ・・・・」

褒められてるんだから、溜息つく必要もないだろ

「僕にとつては、死活問題なんですよ……」

「それで、注文は？」

「ああっ！ そうでした。んんっ！」

真は、咳払いをする

・・・あ、目が変わった

「（）注文はいかがなさいましょつか？・・・お嬢様」

きゅーつ。バタン

「か、カツコイイ・・・

「やつぱり似合つてゐるの〜」

「ちよ、雪歩つー?..」

ヤバい、雪歩が倒れた

たしかにほんの一瞬見惚れたけどさ、様になつて思つたけどさ
まさか、倒れるほどとは・・・

「うへん・・・真ちゃんが・・・真ちゃんがカツコよすぎるよう・・・

・

「ちよ、あつしー..」

顔が真っ赤だつたため、おでこに手を当ててみれば、ものすうい熱
かつた
ほつといたらシャレにならないと思つ

「真!氷もつてきてくれー!大至急!..」

「え?あ、はいっ!..」

その後すぐに冷したため、大爆発するることはなかつた
ただ、ちょっとふらふらしていただけ、暫くここでゆつぐつする
とにした

「翔子、ダメだ。当分ここで厄介になる」

「・・・わかつた。その間、真は借りる」

「了解だ」

「雪歩が倒れたのに、僕だけ接客なんて・・・」

「人気だから、仕方ない」

雪歩が戻つてくるまで、真の接客は続いた

「おかえりなさいませ。お嬢様」

「かしこまりました。奥さま」

「いってらっしゃいませ。ご主人様」

なんだかんだ言って、結構乗り気で執事役をこなす真だつた

清涼祭大満喫（後書き）

真はなに着ても似合いつと思つて。ただし、80年代的なああいうのは
除いて

各キャラの個性をつまみ出してみよつと四苦八苦したのですが、私
の手にはあまりあまつていふような気がして仕方ありません

とりあえず、真理は異端審問にかけられればいいと思つ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5914z/>

バカとテストとアイドルマスター

2012年1月12日20時50分発行